

退任のことば



明 と 暗

前広島大学長 沖原 豊

去る5月20日、学長の任期満了により退官しました。この間、全学の教職員の皆様にはいろいろと御協力、御助力をいただき、心より厚くお礼申し上げます。また、学生や留学生の諸君とも、さまざまな場で話し合いや触れ合いの機会を得まして、たいへん嬉しく思っています。

ところで、4年前に学長に就任したとき、初代の森戸学長が構想された三つの方針を基礎とし、大学の充実発展をはかることにしました。

その第一は、「中四国の中心大学とすること」であります。そのためには、3年余り中断していた統合移転を再開し、学内にただよっていた一種の停滞感、閉塞感を打破する必要がありました。その点については、大学の内外にわたる各方面の御協力により移転が再開され、生物生産学部をはじめ教育学部、理学部などの移転を軌道に乗せることができました。また、昭和61年4月、社会科学研究所および工学研究科情報工学専攻の博士課程の設置により、長年の懸案であった「全学に博士課程を置く」構想が実現し、名実ともに中四国の中心大学となることができました。それは、開学以来、実に37年目の記念すべき出来事でした。

なお、その後、日本語教育学科、集積化システム研究センター、遺伝子実験施設、教育実践研究指導センター、動物実験施設、総合診療部、特殊歯科総合治療部、低温センター等が新設され、さらに医療技術短期大学の創設が決まるなど、本格的な総合大学を目指して整備がなされつつあります。

第二は、「地域性のある大学とすること」であります。従来、大学の使命は教育と研究にあると考えられてきましたが、新制大学の発足とともに「地域社会への奉仕」が教育と研究に次ぐ大学の新しい使命とされるようになってきました。こうした考え方に基づいて、本学は、従来も地域社会に開かれた大学となるため努力を積み重ねてきましたが、本年度から経済学部で全国で最初の地域経済研究センターが新設されたことは、特筆すべきことだと思います。また、放送大学のビデオ学習センターが全国で初めて総合科学部に置かれたこと、学校教育学部で特別講師として社会人の登用が行われたことなどは、地域社会に開かれた大学としての今後のあり方を示す先導的な試みであるといえましょう。

第三は、「国際性のある大学とすること」であります。本学は、開学の当初から大学の国際

化につとめ、世界各国の大学から送られてきた苗木、種子および現金によって大学構内の緑化計画がすすめられたことは周知のとおりであり、東千田キャンパスでは正門前のフェニックス、森戸道路のメタセコイアなど40種類（195本）の樹木がすでに40年の年輪を刻んでいます。

留学生については、私が学生部長に就任した昭和48年当時30名余りでしたが、全学の教職員の御協力を得て、これを100名にまで増やすのに6年間の歳月を必要としました。しかし、その後は順調に増加し、現在では41か国から約400人の留学生が学んでおり、大学のみならず地域社会の国際化にも大きなインパクトを与えつつあります。

以上のように、これまで、未熟ながら大学の発展に微力をつくして参りましたが、その反面、私の在任中に岡本学部長刺殺事件、附属学校副校長の収賄事件、留学生の大麻持ちこみ事件などが起こったことは誠に残念なことであり、このような不祥事が再び生じないよう強く願います。

その意味では、学長としての在任期間は、いわば「明と暗」の4年間であったように思います。広島大学は、とりわけ紛争後に急成長してきた大学であります。急成長の陰には、とかく歪みが生じがちであります。このあたりで、急成長の軌跡を振り返り、内部充実につとめ、着実な足取りで前進することが大切ではないかと思えます。

全学の皆様の御自愛と御多幸を祈ります。

